「担い手が減っている左官職人は貴重な存在。今こそ、業界で存在感を示すチャンスなんです」

㈱英和技研

代表取締役 **鈴木 隆之**

KEY WORD

好機

— kouki —

昨今は、国内の職人の高齢化や担い手不足の問題が叫ばれている。
『英和技研』が手掛ける左官の業界も例外ではなく、逼迫している状態だ。
しかし同社の鈴木社長は早期から、若い職人を得るための取り組みを行ってきた。
それが7～8年前から始めた地元高校への出前授業や職業体験であり、
この取り組みが奏功して、同社には毎年新卒者が加わっているという。
「左官は斜陽産業とも言われますが、担い手が不足している今こそが、
業界の中で存在感を示すチャンスだと私は思っています」と社長。
新加入の職人が活躍できる土壌づくりにも注力し、事業を活性化させていく構えだ。

© 2024 USP-Management Co., Ltd.

時代の変化を見据えて若手職人の確保に注力
業界で存在感を示す会社を目指して
力強く歩を進める辣腕の経営者

幼稚園や学校、病院、スタジアムなど、鉄筋コンクリートの建物の左官工事をメインに手掛けている『英和技研』。専門の職や技術に囚われず、多様化するニーズに柔軟に対応する多能工の会社『TASKA』。両社を推進する鈴木社長は高校での出前授業や職業体験の取り組みを行って若手職人を増やしてきた辣腕の経営者だ。本日はタレントの布川敏和氏が社長にインタビュー。社長の歩みや『英和技研』にて行ってきた取り組み、展望などについてのお話を伺った。

代表取締役
鈴木 隆之

――まずは、鈴木社長の歩みから伺います。

日光市の出身です。子どものころは絵を描くことが好きで、漫画家になりたいと思っていた時期もありました。社会人の第一歩は、高校時代にプールの監視員やイベントのお手伝いなどのアルバイトをしていたホテルに就職。電気設備やメンテナンスを専門に手掛ける部署に所属し、裏方的な業務に携わっていました。

――現在社長は左官職人として活躍しておられますよね。このお仕事に就かれたきっかけと言いますと？

妻と結婚する話をした時に、左官職人である義父から「一緒にこの仕事をやらないか」と誘われたのです。それで「ちょっとやってみようかな」という軽い気持ちで修業を始めたんですよ。それが21歳の時のことでした。

――奥様のお父様が会社を経営されていたのでしょうか。

いいえ、義父は一人親方ばかりの集団に所属していたんです。その集団を束ねている会社があり、そちらが仕事を請けて職人たちに割り振っていたんですよ。そしてこの『英和技研』は職人を束ねる会社に勤めていた方が退職して、２００２年に設立されました。その際に私たち親子もお声掛けいただき、お世話になることに。それが27歳の時のことで、3年ほど経ったころには先代に目を掛けていただき、現場だけではなく段取りも任されるようになって、どんどん仕事が楽しくなっていきました。

――社長にとっては、現場仕事よりも経営のほうが向いていたのかもしれませんね。

ええ。後になってそう気づきました。職人を手配したり、打ち合わせをしたり、見積もりをしたりする中で、仕事に取り組む姿勢が大きく変わりました。10年ほど前、私が37歳の時には取締役になり、このころから現場作業をすることが少なくなりました。そして2年前に先代からご指名いただいて、代表に就任したのです。先代はまだ61歳とお若く、現場が大好きな方なので、今は現場で活躍されているんですよ。

――精力的な方ですね。社長が経営を担う中では、どのような取り組みをされてきたのでしょう。

鳶や大工、塗装といった仕事は分かりやすいですが、左官工事はどういう仕事であるか、あまり世間に知られていません。「左官＝住宅の壁や土間を塗る」といったイメージが一般的にあると思うのですが、例えば当社は大手ゼネコンの仕事がメインで、幼稚園や学校、病院、スタジアムなど、鉄筋コンクリートの建物の左官工事を手掛けているのです。若い担い手を確保するため、まずはそういった現場のことを広く知ってもらいたいと思い、7～8年前から地元の高校への出前授業や職業体験といった取り組みを行ってきました。

――それは画期的な取り組みですね！

最初は地元の工業高校とのつながりをつくり、出前授業を始めました。また、壁塗りを体験してもらおうと希望者を募ったところ、5～6人の生徒さんが参加してくれたんです。その後、先生から「クラス全員参加の実習にしたい」というお話を頂きまして。どうせなら左官だけではなく色々な職種を体験してほしいと考え、他業種の会社の理解と協力を得て実習を行いました。

――そういう機会があれば、「将来は職人として仕事をしよう」と考える学生さんも出てくるでしょうね。

ええ。実際にそうした取り組みを始めたことが契機となり、当社は２０１７年から毎年、高校の新卒者を採用することができています。1つの工業高校から始まった取り組みが評判を呼んで、今では1年掛けて5校で授業や実習を行っているんですよ。この取り組みを続けて、未来へとつなげていければと思っています。

――将来が非常に楽しみですね。今後については、どんな展望を描いておられますか。

私は先代との血縁関係はありませんし、自分の後も身内に託すことは考えていません。私の役目は、次の代に渡すまでに理想の仕組みを作ることだと思っています。左官業界は担い手が不足しているので、今当社に入ってきてくれる若手が一人前になる5～10年後には、業界内で存在感を示す会社になれると思っています。ですから興味を持って当社に入ってくれた人がこの仕事の価値を実感し、誇りを持って取り組めるような土壌をつくっていきたいですね。

ゲストインタビュアー
布川 敏和

時代の変化に対応していくために――

▼鈴木社長が『英和技研』の取締役として活躍するようになったのは 10 年ほど前のことで、当時は業界の過渡期でもあったようだ。同社はそれまで「一人親方の集団を束ねる」形で事業を推進していたが、そのスタイルに限界を感じるようになっていた。社会保険への加入が義務化されたことが大きく、職人を社員として雇用する形に変えていかなければならなくなったのだ。しかし職人にとっては給料から保険料を差し引かれるのは「給料を取られている」という感覚があり、なかなか納得できるものではなかった。社長はその点を丁寧に説明しながら雇用契約を結んでいったが、中には承服できずに辞めてしまう人もいたという。

▼長く続けてきたやり方を変えるのは非常に難しいことで、リスクもある。しかし一方で、時代の変化に対応していくことも必要だ。社長はそのころから「年配の職人が多く、若い担い手が少ない状況を変えていかなければならない」と考えるようになった。そしてどうすれば左官という職業を人々に知ってもらい、若者が仕事を選ぶ際の選択肢に入れてもらえるか、ということを考えた末に行き着いたのが、地元高校への出前授業や職業体験だったのである。

▼「左官は斜陽産業とも言われますが、高齢化や後継ぎの不在で廃業していく業者が多い中で、今こそが業界内で存在感を示すチャンスだと捉えています」と社長。そして好機と捉えて行った同社の取り組みの成果は、「新卒の従業員が毎年加わる」という形で、既に表れてきている。

▲新卒の若い職人が毎年加わっている『英和技研』。「技能五輪全国大会」で従業員が受賞するなどして、業界でも注目されている。

株式会社 英和技研

栃木県宇都宮市幕田町 383-1
URL：https://eiwagiken.jp

合同会社 TASKA

栃木県宇都宮市幕田町 383-1
URL：https://eiwagiken.jp/taska/

after the interview

「若い方々がなかなか職人の仕事に就きたがらない、というニュースをよく聞きます。そのために各業界で高齢化や廃業が進んでいるのを目の当たりにして心を痛めていましたが、鈴木社長のお話を伺って希望の光が見えたような心持ちになりました。色んな業界で『英和技研』さんのような取り組みを推進する企業さんが出てきて、若い担い手が増えていってくれると嬉しいですね。そしてその先陣を切った御社がさらなる雄飛をされることを、陰ながら応援していますよ！」

© 2024 USP-Management Co., Ltd.